

再歩

～再建までのみち～

つちだ きよき かずこ
土田 清喜 さん (69) ・ 和子 さん (67)

行政区：安永1町内



「自分たちで何とかするしかない」

今回は、家屋が解体されて更地が広がる安永1町内に新築された土田清喜さん、和子さんご夫婦の家に伺いました。

「前震で家が全壊しました。木山の実家も全壊でしたが、倒壊を免れた小屋の一部屋を借りて3か月間過ごしました。真夏の暑さは酷かったけれど、母親と過ごすことができたのは良かったと思っています」と話す和子さんの目は少し潤んでいるように見えました。仮住まいの後、土田さんご夫婦はテクノ仮設団地に入居しました。

清喜さんは若いころ兼業農家として一生懸命働いていましたが、体を壊してしまい仕事が思うようにできなくなりました。清喜さんを支えるため、和子さんは57歳の時にヘルパー2級の資格を取得し、働きに出ました。ヘルパーとして仕事は今も続けています。これまでの蓄えは老後のためにと思っていたそうです。

「自宅の再建は相当悩みました。災害公営住宅への入居も考えましたが、今までアパートでの暮らしは経験がありません。やっぱり自分たちの家が欲しかったんです」(和子さん)。

仮設住宅で過ごす中、自宅再建を決心した土田さんご夫婦は、配布されるチラシや新聞、広報まじきなどにはくまなく目を通しました。みんなの家で開かれた住宅金融支援機構の相談会にも積極

的に出席するなど情報を集めました。テクノ仮設団地にくまもと型復興住宅(※)のモデル住宅が建設されると、早速見学しました。何より今後の増築が可能であろうと考えて、最終的には、モデルプランBタイプを建てることに決めました。

「会社の寮に住んでいた息子の名義で家を建てようと思っていたところ、仕事を辞めて帰って来たんです。それで、自分たちで何とかするしかないと思いました」(和子さん)。資金には生活再建支援金や義援金を利用することができて本当に助かったと言います。仕事の収入や年金収入だけでは資金が不足するため、老後のための預貯金も充て、金融機関で10年の住宅ローンも組みました。

全壊の家の解体が終了して3か月後の5月に着工した新しい家は、五和町から来ていた大工さんの頑張りで9月上旬には完成しました。築50年を超える元の家は木造の中二階建ての農家住宅で、6つの部屋があり、台所も広がったそうです。新しい家は約20坪と、その半分の広さもありますが、引越して2週間(取材日現在)、「自分の家に帰って来たんだ」とご夫婦は実感しています。「外堀の工事やこまごましたところは、ゆっくりと、できるしこずつ整えていきます。敷地も広いので花や野菜を植えて楽しみたいと思っています」と清喜さんは話してくれました。

「11月からローンの返済が始まります。まだまだ生活を楽しむ気持ちの余裕はないけれど、長生きできるように定期的な健康診断を受け健康管理に努めたい。元気なうちは仕事を続けるつもりです」(和子さん)。

「自宅の周りは少しずつ家も建ち始めたけれど、夜は電気の点いている家が少なく本当に寂しい。ご近所の方々にも早く帰ってきて欲しい」(和子さん)。土田さんご夫婦のささやかな願いです。

※くまもと型復興住宅：熊本地震で被災した多くの方々が、住宅再建を無理なく進めることができるように、地域に根ざした工務店をはじめ住まいづくりのプロ集団「地域住宅生産者グループ」が建設する「地震に強く、地域産材等を利用した良質でコスト低減に配慮した木造住宅」。

テクノ仮設団地内に、それぞれ特徴を持つ3戸のモデル住宅(モデルプランA・B・C)が展示されています。

【モデルプランの特徴】

A：熊本県産材の木材を使い、リビング床は県産材の無垢の松を和室には県産の畳を使用/熊本夏の強い日差しを考慮して、2坪以上の軒下を作り快適なリビング空間を実現

B：土間を持つ玄関のある、農家でも使いやすい住宅/使い勝手の良い二階続きの和室のある居心地の良い空間

C：五木村の葉枯らし乾燥材をふんだんに使用した2階建て住宅/床、壁、天井などの内装にも木材が使用された、安らぎのある健康的な空間。

この他、「住まいの復興ガイドブック」には、39グループによる55のプランが掲載されています。